



山登如

2020年度

付中通信第6号

教育に感動を！

2020.7.5

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

小窓の雨滴



西日本集中豪雨は2年前の7月、死者263名、住家の全壊6783棟など、甚大な被害をもたらしました。ちょうど今年も同じ時期、梅雨前線等の影響で線状降水帯が九州南部で発生、予報では今週一杯その帯が日本列島を横断しながら移動していく模様です。すでに熊本県では一級河川が氾濫、正視できないような惨状がテレビ画面に映し出されています。新型コロナウイルスと言い、線状降

水帯と言ひ、その規模や形は対極にあるように見えますが、同じ自然の猛威に変わりなく、改めて人力のか弱さ、人の営みのはかなさを感じずにはられません。人類は、この自然との闘いや、この自然をいかに有効利用するか月に日を費やしてきたはずでした。ところが、その歩みそのものが、身のほど知らずのおごり高ぶりではなかったのかと、頭を打たれる思いがしてきます。

自然とは何か

しかし、だからと言って、新型コロナウイルスの蔓延や線状降水帯の形成が人類に警鐘を鳴らしているなどと考える気は毛頭ありません。もちろん、宗教的な観点から、そういうものの見方によって私たちの生活を見直すべきだという人たちがきつといることでしょう。そういう人たちの立場を否定はしません。ですがそれは「教育」ではないと私は思います。私たち人類は自然と対立しているわけでも、自然の中の特別な存在でもありません。それが私たちの「教育」の根本にあると思います。私たちも自然の一部であり、しかも自然をある程度客観的に観ることができる知性を有し、しかも創造力を備えた存在だという点が、人間の謂い（いわれであり特殊性）だと思ふのです。

感情的な存在

わたしは今、「人類」とか「私たち」とかという言葉を使いましたが、まさにこれが「客観的に

観」ていることの証しです。ところで、その一方には私という個人がいます。私自身は実は、新型コロナウイルス感染症対策のために日々マスクをつけて生活することにうんざりしています。いつまでつけ続けねばならないのだろうと政府の方針に文句を言いたい気持ちを抑えています。

そしてそんな私には高齢な母がいます。もしも運悪く、彼女がコロナウイルスに感染して亡くなってしまったとしたら、私は今よりはもっと強くコロナウイルスを憎み、きっとコロナ禍を招いた中国武漢の対応や日本政府の対策にも、いきなり本気で苦情を申し述べ始めるかもしれません。それが私的な感情のままに動く個人というものであり、それは決して間違った行動でも感情でもありません。



昨年の楽学フェスタ 2019 の一コマ

2つ以上の選択肢を持つこと

「教育」は、そんな時、私に2つ以上の選択肢を与えてくれます。まずは新型コロナウイルスを憎まないという選択肢です。

それは同時に感染経路を明らかにして、母に感染させた人を憎まない選択肢です。それから感染症への対応や対策に一方的に文句をつけるのではなくて、なぜその対応や対策が行われたのか、その理由や過程を考えたり調べたりして、問題点を課題に昇華しようという選択肢です。

さらにまた、感染者を差別しない選択肢です。その差別を作り出す根っこにある人の性向は、他の差別を引き起こすものと同じです。だから、差別とは何かということを考えるきっかけをコロナ禍から与えられるという選択肢でもあります。

感動とは何か

選択肢が増えれば増えるほど、私たちの生活は豊かになります。豊かというのは、多くのものの中から選択できるということではないかと思います。それはものの考え方にもあてはまります。生徒に多くの考え方、選択肢を持たせるような教育こそ、感動を呼ぶものではないでしょうか？